

海外ボランティアを行う看護学生向けサービスラーニングカリキュラムに必要な情報と支援策：タイのコミュニティにおけるボランティア活動を通じた学習体験評価

著者	長松 康子, 田代 順子, 菱沼 典子, 松谷 美和子, 及川 郁子, 麻原 きよみ, 平林 優子, 大森 純子
雑誌名	聖路加看護学会誌
巻	11
号	1
ページ	62-67
発行年	2007-06-20
URL	http://doi.org/10.34414/00014989



海外ボランティアを行う看護学生向けサービスラーニング カリキュラムに必要な情報と支援策

— タイのコミュニティにおけるボランティア活動を通じた学習体験評価 —

長 松 康 子¹⁾, 田 代 順 子¹⁾, 菱 沼 典 子¹⁾
松 谷 美和子¹⁾, 及 川 郁 子¹⁾, 麻 原 きよみ¹⁾
平 林 優 子¹⁾, 大 森 純 子¹⁾

抄 録

ボランティア活動の一領域である海外ボランティアに焦点をあて、サービスラーニングカリキュラム作成に必要な情報と支援策について資料を得るため、タイ国でのボランティア活動に参加する看護学生が直面する困難と、その解決のために有効な情報や支援、および、海外ボランティア受け入れ担当者が望む情報・支援について調査を行った。調査は、タイ国ボランティア活動に参加した A 看護大学 4 年生 8 名に対し、活動終了後にフォーカスグループディスカッションを、タイ国 B 大学看護学担当教員 4 名に英語によるアンケートを実施した。ボランティア活動は、タイ中心部のスラム地区の小学校スクールナース活動、在宅ケア、デング熱キャンペーン、ナースクリニック、孤児院で実施された。事前準備として、タイの文化・習慣・宗教、ヘルスシステムや健康問題、基本的なタイ語挨拶などを実施し、それらは概ね役立った。しかし、それでも学生は①文化・言語：道に放置されるゴミや野犬、スタッフの説明が理解できない、②ボランティアとしての参加の仕方：見学だけか、ケアしてもよいのか、③心理面：孤児との別れの辛さ、異文化生活における精神的疲労、④看護ケア：日本と異なる方法、などの困難を経験していた。これらに対しては現地で、日々の振り返り、学生同士のディスカッション、教員やスタッフによるスーパーバイズなどの支援を行い、有効であった。一方、現地担当者は、スケジュールや食事に対する学生の要望や学生の看護知識・技術についての情報を求めている。さらに、事前学習の指導や現地での学生の支援を日本の教員に期待していた。これらは、サービスラーニングで提供する海外ボランティア活動の情報に反映することが可能であると考えられる。

キーワード：サービスラーニング、ボランティア、異文化看護

I. はじめに

1995年の阪神淡路大震災をきっかけに活発になったボランティア活動であるが、看護学生においても例外ではなく、多くの学生が積極的に病院、福祉施設、地域に出て様々なボランティア活動に携わっている。岡本がボランティアの基本的性格として、「自発性・主体性」「公共性・福祉・連帯性」「無償性・非営利性」「自己成長性」「継続性」をあげているように（岡本他，2005）、様々な社会問題に貢献するべく自ら社会に出て奉仕することは、多くを学び、成長するための貴重な機会となっている。

著者らは、学生の地域ボランティア活動体験について

の記述と振り返りを促すことによって学習効果を高め、評価することを目的に、文部科学研究費助成を受けて、「看護学におけるサービスラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価」を行っている。サービスラーニングとは、地域社会のニーズに沿ったサービスに参加することによって意図的になされる経験学習であり、コースの教授内容を深め、市民としての責任感・社会的価値を高めるような大学と地域とのパートナーシップ・連携によってなされる教育カリキュラムである（松谷他，2004）。ボランティア活動に必要な情報を提供し、活動上の課題や疑問等について学生がフィードバックを受けられるようカリキュラムやコンテンツの開発を

受付日 2007 年 1 月 29 日 受理日 2007 年 4 月 27 日

1) 聖路加看護大学

進め、2007年1月に看護学生向け健康・保健領域のサービスラーニングのウェブサイトを開設した。しかしながら、わが国においてこのようなサービスラーニングの実践例が無い場合、今後も引き続き、ボランティア活動を行う看護学生が直面する困難およびその解決のための情報や支援策、地域のボランティア担当者が教員に対して望む支援などについて明らかにしておく必要がある。

なかでも、最近増加している海外におけるボランティア活動は、感受性豊かな学生たちが広い視野を養うのによい機会であるが、異なる言語・文化の中で友人や教員等の支援を受けにくいことから、学生に過重の負担がかかることがある。最近では大学低学年のうちに海外のスタディツアー等に参加し、そのツアー中あるいは前後にボランティア活動を行う学生も珍しくない。看護学生たちがボランティア体験を安全に全うし、よい学びの機会とするためには、海外ボランティアにおける困難についての情報とその解決に必要な支援の解明が必要である。

そこで本研究は、「看護学におけるサービスラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価」の一部という位置づけで、看護学生のボランティア活動の一領域である海外ボランティアに焦点をあて、サービスラーニングカリキュラム作成に必要な情報と支援策について資料を得ることを目的とする。

II. 研究目的

A 看護大学の国際看護総合実習で行うタイ国バンコク市でのボランティア活動に参加する看護学生が直面する困難と、その解決のために有効な情報や支援、および、海外ボランティア受け入れ担当者が望む情報や支援について資料を得ることを目的とする。

III. 研究方法

1. 調査期間

タイにおける実習は2006年8月21日より9月1日まで行われ、8月29、30日、9月1日の3日間がボランティア活動にあてられた。

2. 研究対象

A 看護大学4学年学生8名および、タイ国B看護大学のボランティア活動担当教員4名を対象とした。

3. タイでボランティア活動を行う経緯

A 看護大学とタイ・B大学看護学部は姉妹校で、2005年度より相互に交換留学生の受け入れを実施している。2006年度はA看護大学で総合看護実習国際看護を選択した学生8名がタイにおける9日間の実習の後、地域ボランティア活動に参加した。学生は留学経験をどのよう

に学びとするか、教員はどのような援助をすべきかについて評価する必要がある、本研究の目的にも沿うことから、研究が実現した。

4. データ収集と分析方法

ボランティア活動終了後に対象学生にフォーカスグループディスカッションを実施した。ディスカッションは学内の個室において2時間ほど行われた。学生の自由な意見を反映するために、モデレーターは学生代表が務めた。事前にテーマ「タイにおけるボランティア活動中に困ったことは何か」「前もって準備しておいたほうがよかったことは何か」「教員にどんな支援をして欲しかったか」について参加者に説明が行われた。内容はワープロを用いて逐語記録を行い、その結果をディスカッション終了後に参加者に示して、内容の確認を行った。逐語記録を用いて、以下の手順で内容分析を行った。①「ボランティア活動で経験した困難」「役立つと思われる事前準備」「望まれる支援」を抽出し、一覧表にした。②それぞれの分析項目ごとに再度逐語記録から該当する内容を抽出してカテゴリー化を行った。

タイ・B大学教員に対しては、英語アンケートを行った。質問項目は「ボランティア活動中に起こった問題は何か」「ボランティア学生を受け入れるにあたって望む情報、準備、日本人教員に望む支援」について自由に記載してもらった。

5. 倫理的配慮

調査協力者となる看護学生およびB大学教員に対して、研究目的を説明した上で協力を依頼し、同意が得られた者には承諾書を記入してもらった。個別データは全て匿名とし、情報は研究目的のみに使用する。データは厳重に、施錠できる場所で保管しプライバシーの保護を厳守する。なお、研究開始前に、研究計画書を聖路加看護大学の研究倫理委員会の審査を受け、承認された。

IV. 結果

1. タイ総合実習の概要

実習は12日間にわたり、B大学で行われた。(表1) タイの保健システム、地域看護、看護教育、伝統医療などの講義を受けた後、大学、病院、保健センターおよびヘルスボランティア活動などを見学し、最終3日間を地域ボランティア活動にあてた。ボランティア活動は2グループに分かれ、それぞれにA大学教員、B大学教員が付き添った。活動地はタイ中心部のスラム地区の①小学校活動、②在宅ケア、③デング熱キャンペーン、④ナースクリニックと⑤孤児院(全員)である(表2)。最後に成果をB大学教員に発表し、フィードバックを得ることで修了した。実習中はB大学の学生がバディとし

て学生の支援をしてくれた。

表1 タイ総合実習の概要

日	午前	午後
1	オリエンテーション	大学見学
2	講「タイの保健制度」	見 講「タイの伝統医療」
3	講「タイの看護教育」	見 低所得者外来
4	講「タイの地域看護」	見 保健センター
5	見 地域保健ポスト	見 ヘルスボランティア活動見学
6	水上マーケット観光	
7	休日	
8	見 模範地域	
9	地域ボランティア活動	討議・発表準備
10	地域ボランティア活動	討議・発表準備
11	発表	歓送会
12	ボランティア活動	

講：講義 見：見学

表2 参加ボランティア活動とその内容

参加施設・参加活動	活動内容
①小学校スクールナース活動	健康診断介助, 環境衛生検査と整備, 歯磨き促進プロジェクト見学
②在宅ケア	寝たきりの在宅患者に対する全身清拭, バイタルサイン測定, 体位交換, 吸引, 褥創ケア, N/Gチューブ交換 (見学のみ)
③デング熱キャンペーン	水瓶や排水溝のボウフラ発生状況の確認と駆除剤散布, パンフレット配布, 住民への教育, 住居環境の観察
④ナースクリニック	受診者のフィジカルアセスメント, 患者教育
⑤孤児院	子どもと遊ぶ, スキンシップ

2. 事前準備

実習2ヶ月前に来日したタイ人看護学生らと、それぞれの国のヘルスシステム、医療問題、看護教育制度についての英語発表会を行う機会をもった。また、タイ実習における個人のテーマを設けさせ日本での情報収集を促した。さらに、タイ語で挨拶と名前が言えるよう準備した。

一方B大学とは連絡を取り合い、各学生の興味、テーマ、看護レベル、食べ物アレルギーなどの情報を共有し、学生の興味に応えるとともに、外国での実習で心身に無理をきたさないプログラムを協同で作成した。

3. 学生が体験した困難、必要な事前準備と支援策

ボランティア活動中に学生が体験した困難、その予防のために事前に行った準備、現地で教員が行った支援策を表3に示す。

1) 文化・言語の違い

(1)文化や習慣の違い

ボランティア活動を通してタイ文化に触れた中で、「用水路のゴミ」「多数の野犬」「過量の糖分を含むおやつ」の習慣、「女性は僧侶に触れてはいけない」などに対して、学生は驚きや戸惑いを感じた。文化や習慣についての事前学習やタイ人看護学生との交流は、「その国の文化、習慣、宗教についての基礎情報を得るのは重要」であったことから事前準備として有効であるとのフィードバックを得た。それでも遭遇した疑問や驚きについては、教員のスーパーバイズや学生同士の討議が、カルチャーショックを学びと変える上で有効であったとの回答を得た。さらに、今回準備できなかった準備として「文化や宗教におけるタブーの確認」は必ずして欲しいとの要望があった。

(2)コミュニケーション力の不足

外国における活動に参加する場合、外国語能力が非

表3 ボランティア活動で看護学生が体験した困難、事前準備および現地支援

	学生が体験した困難	事前実施した準備	現地で実施した支援
文化・言語	a) 文化の違い 「道のゴミや野良犬」「甘い飲み物とおやつ」「女性は僧侶に触れてはいけない」 b) コミュニケーション 「説明が理解できない」「自分の質問が伝えられない」、「住民に気持ちを伝えなかった」	a) タイ人看護学生との交流 ・タイ文化・習慣の事前学習 b) 挨拶程度の現地語の習得	a) 教員によるスーパーバイズ ・日々の振り返り ・学生同士の討議 b) 通訳
参加の仕方	a) 参加の仕方・介入の程度 「見学だけか?できるケアはしてよいのか?」「スタンダードプリコーションが欲しい」 b) 健康問題とボランティア活動の関連 「住民の健康への自分の活動意味がわかりにくい」	a) 毎日のオリエンテーション b) 現地のヘルスシステムや健康問題に関する情報収集	a) 参加方法、スタンダードプリコーションの確認 b) 教員によるスーパーバイズ ・日々の振り返り ・学生同士の討議
心理・精神	a) ショック 「孤児との別れが辛かった」 b) 異文化に伴う心身疲労 「食物・気候の違う外国では思いのほか疲れやすかった」	b) 現地についての情報収集 ・常備薬の準備 ・余裕あるスケジュール ・B大学への学生の興味、食物アレルギー情報の提供	a) 教員によるスーパーバイズ ・日々の振り返り ・学生同士の討議 b) スケジュールの再調整
看護ケア	a) 準備不足によるもの 「突然のケアに戸惑った」 b) 日本と異なる方法 「常温水による全身清拭」 「素手で行う吸引や排泄ケア」	a) 看護技術の復習	a) b) 教員による確認・指導

常に重要となる。今回の活動は英語を中心に行ったが、住民と触れ合う場面ではほとんど英語が通じなかった。事前に準備したタイ語による挨拶や自己紹介は住民に好評で、学生からは、「初対面の緊張をほぐすのに役立った」との評価を得た。しかし、複雑な内容を理解しあうにはそれ以上の語学力が必要で、「活動の説明が理解できない」、「質問が伝えられない」場面が生じたため、教員が通訳を行った。「住民に感謝の気持ちを伝えきれずもどかしかった」学生は、「ジェスチャーや握手で気持ちを表したら、相手もわかってくれた」と嬉しかった体験を語った。

2) ボランティアとしての参加の仕方に関するもの

(1)参加の仕方, 介入の程度の曖昧さ

毎日オリエンテーションを行い、活動の目的と内容および注意事項を確認したが、小学校保健活動見学の際「どのように活動に参加したらよいか」「何を期待されているか」がわからないとの不満が聞かれた。これは2班に分かれたうち、日本人教員が同行できなかった班からの感想である。これに対し、「見学だけなのか、質問や助言をしてもよいのか、できるならケアはしてよいのか」など、具体的な参加の程度を示すことが望まれた。また訪問看護ケアの前に、「スタンダードプリコーション」の再確認をして欲しいとの意見が聞かれたので、確認しながら活動を行った。

(2)現地健康問題とボランティア活動の関連性

今回のボランティア活動について、「それぞれの活動が地域の健康問題にどのように貢献するかがわかりにくかった」との意見が聞かれた。これに対し、日々の振り返りと討議を行ったことで、「活動の意味を理解することができた」との評価を得た。また、「タイのヘルスシステムや健康問題について学習しておいたことが理解に役立った」との意見が聞かれた。

3) 心理的困難

(1)ショック

孤児院で子供たちと別れる際、学生は「別れるのは見捨てるようで辛い」「寂しい子供がたくさんいることに理不尽さを感じる」などの感情を覚えた。これらについてはメンバー同士で多くの話し合いがもたれ、「友人との分かち合い」、「教員やスタッフによるスーパーバイズ」が困難を学びへと転換させる助けとなるとの回答を得た。

(2)異文化生活における心身の疲労

B大学と協議の上、余裕をもったプログラムを作成したが、心身の疲労が多く学生によって経験された。その原因としてあげられたのは「楽しいので頑張りすぎた」「食べ物・気候・言葉が違うと思いのほか疲れる」などであった。このため、現地でスケジュールを再調整した。体調を崩した学生からは「病気のときは日本の持参薬が心強かった」と持参薬準備の重要性があらためて認識された。

4) 看護ケアに関するもの

(1)準備不足によるもの

日本で基礎看護を復習してボランティア活動に臨んだ学生であったが、事前に患者情報を提示できなかったため、ケアの場面で戸惑う光景が見られた。教員や住民に指導されて活動を行った。「上手くできなくても怒られなかったので、一生懸命できた」とポジティブに受け取る者がいた一方、フィジカルアセスメントが思い出せなかった学生は、予習するために「実施予定のケアを教えて欲しかった」と答えた者もいた。

(2)日本と異なるケアの方法

ごく基本的なケアでも、タイではやり方や機材が異なるものがあった。「常温水での全身清拭」「素手での吸引や排泄ケア」などに驚いて、手が出ない場面が見られた。これらに対しては、現地教員やスタッフが指導と確認を行った。学生からは「教員がいるだけで安心して行えた」と、支援としての有効性が確認された。

4. 現地教員がボランティア活動中に経験した問題と日本の教員に望む支援

1) ボランティア中に起こった問題

4名全ての担当教員は「問題はなかった」と答えた。その理由として、「引率教員がいたため」「学生が熱心に勉強したため」との回答を得た。

2) 日本の教員に望む情報, 準備, 支援

(1)情報

現地担当者が望んだのは、学生情報と日本の看護教育プログラムに関するものであった。前者は活動プログラムに反映させるための学生からの要望と、学生の食事制限の有無等であった。また、後者は学生の看護知識や技術の習得度を知るためである。

(2)事前準備

事前学習として、「タイのヘルスシステムや健康問題、プライマリヘルスケアなどを指導して欲しい」「健康管理を含め安全な渡航となるよう指導して欲しい」などの希望があった。

(3)現地での援助

学生が直面するボランティア困難を支援するため、通訳やスーパーバイザーとしての役割を期待された。

V. 考察

文化や習慣の相違は、外国における看護の学びの上で最も大きな学習課題である。戸塚は、看護における文化の考慮を「異文化に属する患者をケアする」「異なる文化の看護師と一緒に働く」という二つの側面から重要性を説いた(戸塚規子, 2004)。今回のボランティア活動では、まさに異なる文化をもつタイの人々のための活動を、タイの看護職の人たちのご指導の下で行うことがで

きた。学生たちは様々な発見をし、中には困難と感じることもあったが、教員や学生同士の支え合い、日々の振り返りを通して、それらを学びへと変えていった。事前にプログラムやボランティア活動について情報を与え、準備を行って臨み、それらは概ね役立ったが、学生に与える情報や、教員による介入の程度は判断が難しいところである。外国で学ぶ最大の利点は、人々の生活を肌で感じ、映像や本からは決して得られないリアルな体験をすることで、感覚や感情を伴った深い学びができることだからである。また、自分のもてる能力を総動員して臨機応変に臨むことも看護師にとって重要な能力であることから、全てを準備万端整えることが最善策とは限らないとの印象をもった。十分な異文化刺激を体験させながらも、それが単なる不快な経験やストレスとならずに学びと結実するよう支援するのが教員の役割である。今回は患者や実施予定ケアの事前情報不足について不満があったので、今後は学生が自信をもって活動にあたるよう事前準備を行う予定である。また、スタンダードブリコーションについて、不安をもった学生がいたが、学生が安全に安心して活動にあたることは活動の大前提になるので、今後は事前確認を徹底する。

今回は、日本人教員の同行、タイ人留学生との交流やボランティア活動前の滞在期間にタイの文化に触れていたこと、現地でのタイ人学生パディによる支援などからカルチャーショックによる困難は少なかった。しかし、個人で海外ボランティアに参加する場合は支援が限られること、経験をともに振り返る仲間が限られることなどから、さらなる困難が予想される。

また、現地担当教員が最も望んだのは学生に関する情報であった。日本における看護教育や学生の看護レベル、タイにおける興味、さらには食のアレルギーなどをプログラムに反映して頂いた。ともに学ぶためには、相手の文化を受け入れる姿勢が大切であることが、タイ国の担当教員自らによって示された。日本人教員が現地で求められたのは、このような文化のギャップを埋め、円滑に学びを進めるための支援である。

1. サービスラーニングへの応用の可能性

本研究で明らかになった困難や望ましい事前準備について、サービスラーニングのサイトで情報を提供するこ

とで、海外ボランティアに参加する看護学生たちの支援に貢献することができると考えられる。学生自身が、困難解決のための解決策としてあげていた「振り返り」や「教員によるスーパーバイズ」は、「リフレクション」、学生同士のディスカッションは「フォーラム」としてすでに著者らのサービスラーニングサイトで応用されている。

VI. 結論

タイの地域コミュニティにおけるボランティア活動では、文化・言語、参加の仕方、心理面、看護ケアについての困難が経験された。それらに対し、タイの文化・習慣・宗教、ヘルスシステムや健康問題などの事前準備や、現地における振り返り、ディスカッション、スーパーバイズをはじめとする支援が役立った。また、現地担当者は、学生の希望や知識・技術の程度についての情報に加え、事前学習の指導や現地での学生の支援を日本の教員に希望していた。これらは、サービスラーニングで提供する海外ボランティア活動の情報に反映することが可能であると考えられる。

謝辞：研究にご協力くださいましたタイ国B大学看護学部地域看護教室の先生方に感謝申し上げます。

本研究は文部科学研究費助成研究（代表研究者：田代順子）、「看護学におけるサービスラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価」の一部である。

引用文献

- 岡本栄一監修(2005). ボランティアのすすめ－基礎から実践まで－. 24. ミネルヴァ出版.
- 戸塚規子(2004). 文化の違いを考慮した看護. 国際看護研究会. 国際看護学入門. 187-123. 医学書院.
- 松谷美和子, 他(2004). 看護研究法としての「サービス・ラーニング」: 実践研究文献レビュー. 聖路加看護大学紀要. 30. 31-38.

Useful information and supports in the service learning curriculum for the nursing students who work as volunteers overseas.

- Experiences of Voluntary activities by Japanese nursing students in Thailand -

Yasuko Nagamatsu, Junko Tashiro, Michiko Hishinuma
Miwako Matsutani, Ikuko Oikawa, Kiyomi Asahara
Yuko Hirabayashi, Junko Omori
(St. Luke's College of Nursing)

Purpose: To develop an evidenced-based service learning program for Japanese nursing students participating in volunteer activities in Thailand, we addressed the following questions: 1) what are the difficulties experienced by Japanese nursing students, and 2) what is the necessary information and support for the nursing student volunteers in this program?

Methodology: Qualitative data was collected from 8 nursing students who participated in the volunteer activities, using a focus group discussion. They discussed their volunteer activities in an elementary school, home nursing, dengue campaign, nurse clinic and orphanage in Thailand in 2006. The four participating Thai nursing instructors responded to the questionnaire regarding the learning needs of the students and how to improve the program. Data was thematically analyzed.

Result: Students difficulties were sorted into 4 categories: 1) Culture and language: dealing with garbage and homeless dogs on the street, for instance. 2) Attitude as a volunteer: observation or care? 3) Emotional/mental problems: heart-breaking farewell to orphans. 4) Nursing care: different ways of care between Japan and Thailand. Useful information for students was about culture, language, healthcare system and health problems in Thailand. Information about activities included the purpose and expected students' attitude and role were appreciated. Useful forms of support described by students were: reflection, discussion with other students and supervision by instructors.

Requests from Thai instructors included information about the programs and nursing skills level of Japanese students. They also expected Japanese instructors to give necessary information about Thailand and to provide a support to the Japanese students in Thailand.

Conclusion: Information about difficulties faced by Japanese nursing students participating Thailand-based volunteer activities, useful advance information and possible supports in the field can improve the service learning programs. The daily reflection form was developed with the assistance of students and already adopted in the program.

Key-Words: Service Learning, Volunteer, Transcultural Nursing